

サタンの部屋のドアを開けると私は螺旋階段へと続く通路から下を見下ろした。

積み上げられた本が部屋の半分以上を占める見慣れた光景に人気はなかった。

私の前にはサタンの手が届く範囲でびっちりと積み重ねられた本がレンガで作った壁のようになって

いる。私はあらかじめサタンから聞いておいた目的の本がありそうだと思われる場所に立つと、思わず

ため息をついた。この壁の中から魔界薬学のレポートに必要な一冊の本を探し当て場合によってはこの

壁状になつてはいる本の山から抜き出すという作業をしなければならなかった。

本を探すまでは良いのだが、抜き出す作業はジェンガの棒を崩さないようにゆっくりと抜くのと同じ

要領の作業で、一歩間違えると本の山が一斉に崩れ、それに巻き込まれるという罰ゲームが待っていて

るとしても危険で緊張が伴う作業だった。さす外は魔法らしきものを使用しているのを見た事がない。

サタンは床に近い部分の本を抜こうとする時は魔法を使って本を持ち上げてから取り出していたが、

それ以外に魔法らしきものを使用しているのを見た事がない。

（どうやって魔法を使おうか）  
私はサタンが魔法を使わずに本を取り出している時のことを思い出そうとしたが、全く思い出せな

かった。  
（しようがない。探すか・・・）  
私は気を取り直し本の壁から目的の本を探した。

（あつた）  
目的の本はすぐに見つかったが、それは本の壁の中ほどというとても難しい場所にあつた。

（無理はするなよ）  
その場所から本を抜こうとして一瞬サタンの言葉が頭をよぎった。

そう、多分今この場で私がサタンの真似をして魔法を使わずにこの本を壁の中から抜き出そうとしたら間違ひなく本の壁を崩した。

スカートがポケットの中から DDD を取り出し時間を確認するとまだ夕食の時間まで大分あった。私はサタンの帰ってくるまでこの部屋で待つことにすると、近くにあった本を取り出しベッドに横になつて読み始めた。

特注で作らせたものだろうか？

ベッドの横幅と同じというまるで抱き枕のような枕に頭を置こうとすると妙に高くて頭が置きにくい。もしやと思ひ枕の上半身を預けてみると、今度は見事なまでにぴったりと枕に収まった。

さらに角度もちょうど寝転がりながら本を読むにはちょうど良く、この部屋はサタンが自分のためだけに用意した空間であることがよく分かった。

自分用に用意された部屋の備え付けられていたセミダブルベッドの広さに慣れてしまったのか、人間界で散々使つていたはずのシングルベッドが妙に狭く感じる。

さらにベッドの中央に積み上げられた本のせいでベッドの半分しか横になれるスペースがない。サタンは一体普段このベッドをどんなふうに使っているのだろうか？

「落ち着く」という理由からバスタブをベッド代わりに使っているレヴィアタンをのぞけばサタンは兄弟たちの仲で一番小さなベッドを使っているがそれは一体どうしてなのか疑問に思い、私は両足を曲げて小さくなりながら読書続けた。

「あれ？伊吹いたの？」

呼ばれて上を向くと通路の柵にかまつてアスモデウスがこちらを見ていた。

アスモデウスは小走りに螺旋階段を下りると私の近くに来た。

「サタンから本を借りてここに来ただけ？」

「サタンから本を借りて来たんだけど、取るのが難しい場所にあるから帰ってくるのを待っている」

後ろにある本の壁を見ながらアスモデウスがそう言ったので、私はベッドから下りて目的の本がある場所まで行った。

「ああ、そこ？・・・確かに伊吹じゃ取るの難しいかも・・・。ちよつと待っていてね」

そう言うときアスモデウスは本の壁に手を当てサタンがやっているのと同じように魔力で積み上げられた本を浮かせた。

（おおい）  
「早く取って」

アスモデウスの言葉にハッと我に返ると、私はすぐ目的の本を取り出した。

「アスモデウスは慎重にそつと手を動かすと本を元に戻した。」

「ありがとう」

「どう言いたしまして」

「僕？僕は歴史の本借りて来た」

「え！？アスモが勉強して珍しい」

「僕だつてたまには勉強するよ。ただ・・・歴史は苦手だけ」

「アスモ歴史苦手なの？」

「うん。覚えなきやいけないことがたくさんあつて本当に大変。一応伊吹よりも長く生きてるけど、他の世界での出来事とかよく分からないし」

「なに？もつと僕は歴史とかについて色々知っていると思っていた？」

アスモデウスは本の壁の中から目的の本を探しながら言葉を続けた。

その最中私の目にはアスモデウスの耳にイヤリングが下がっているのが見えた。

どんなイヤリングか？までは見えなかったが、制服を着ている所から私は今日一日そのイヤリングを  
しているというのを察した。

「そうでもないんだな。僕魔界の事だつたらそれなりだけど人間界の事とかあまり興味ないし。あ、有った」

「そう言うときアスモデウスは再び魔力で積み上げられた本を浮かせた。」

「でもね・・・僕だから教えられることもこの世にはある」

「そう言うときアスモデウスは私を抱き上げサタンのベッドの上にひよいと乗せた。」



ばいに広がるように、私の口の中に広がっている快感も脳みそを幸福な快感でいっぱいにした。